

「ゆりかご15年

いのちの場所」

「ゆりかご」2世

いのちの増殖」

2023年度 第12回日本医学ジャーナリスト協会賞
大賞作品



熊本日日新聞社「ゆりかご15年」取材班代表 田端美華

「ゆりかご」に預けられて ある青年の告白

特別養子縁組した両親
と共に(1面掲載の写真から)

「ゆりかごの後も、人生
は続いていく。そっちの
方が、ずっと長いし、大
切なんじゃないでしょ
うか」



「こうのとりのゆりかご」とは



○慈恵病院（熊本市）が2007年5月に開設
○扉を開けるとブザーが鳴り、看護師が駆け付ける仕組み

○2022年度までに170人が預け入れ
（最も多い年は08年の25人）

○自宅や車中などでの出産（孤立出産）
は半数以上の91人

○判明している分で、父母の居住地は熊本県が13人、熊本を除く九州は41人、関東は27人、中部16人、近畿16人。新幹線などを乗り継ぎ、長距離移動するケースも

「内密出産」とは

- 病院の担当者のみにも身分を明かして出産する制度で、ドイツがモデル
- 2019年12月に慈恵病院が独自に導入
- 21年12月に初めて出産があり、23年6月までの内密出産は通算14例
- 23年8月には内密出産で生まれた子ども1人について養親と法的に実の親子となる特別養子縁組が初めて成立

連載で報じたこと

- 7部立て計50回掲載。いずれの部も初回を1面、続きの本文を社会面トップ記事で掲載
- 第1部で宮津さんの生い立ち
- 第2部と3部でゆりかごに預けた母親たち
- 第4部「出自を知る権利」
- 第5部「内密出産」
- 第6部でフランスの匿名出産、ドイツの内密出産の現状
- 第7部血のつながらない「家族」
- エピローグ 宮津さんの思い

心打ち明け「私が育てたい」

慈恵病院（熊本西区の）お母さんへ」と書かれ左紙が自ら入った。その手紙は「赤ちゃんポスト」にたどり着いたアオイさん（仮名）は、赤ちゃんを抱いて扉の前に立つ時、相談を呼び掛ける看板を見つけた。「相談できるなら、こんな時まで預けて来なう」と目を奪った。

「今さら隠せば、アオイさんは腹をくくって身を明かし、自立していなのに

妊娠して自分を恥じた。出産後に赤ちゃんへ愛情が湧いた。この「離れなご」と二人を赤々とまで思った。何れも打ち明けた。応対したのは当時産科部長だった田田由貴子さんで、「今後どうしたい」と聞かれ「アオイさんは、私が育てたい。卒業して仕事に就いたら一緒に暮らしたい」と本音を漏らした。自分したことを責められると思ったが、「手伝って」と励まされ、全身の力が抜けていった。

その時、診察のなめ別室に連れて行かれた赤ちゃんの泣き声が聞えてきた。アオイさんは泣いた。「アオイ、罪悪感ものすけらあ、ぼろ泣きました。でも、ほっとした気持ちもあったんです」

打ち明けたことで、家族に話せる勇気も湧いた。地元に戻り出て出すと、離婚して別居していた母親はアオイさんを責めたが、父親の反応は予想と違った。暖かれると思っていたに「一切怒らず、「十七七を幸せにするた

め、おまえががんばらないうと、まと言ってくれた。父親は慈恵病院で赤ちゃんと対面する。このころに抱っこし、名前まで考え始めたい。アオイさんは赤ちゃんをいっただ元地の乳児院に預け、中部地方の専門学校に戻り、赤ちゃんを生き取るため、その間、父親が乳児院に通い、赤ちゃんの写真と動画を撮影してアオイさんに送り続けられた。アオイさんは成長する様子がつれなかったが、赤ちゃんの手記を取るまでのモチベーションだったとアオイさんは振り返る。卒業後、地元就職を決めると、乳児院にたびたび会いに行った。面会でも、そっけなかったら今でも、外泊重ねて親子の関係を構築。数年後、親子一緒に暮らしが実現した。

初めての子育ては当初、まどいかなかった。「赤ちゃんとなきゃ、かみかみ言っ。子どももいなかったと思。こ）後悔する。しかし、今は受け留めて、二人でゲームを楽しめるようになった。近くまで暮らす父親が大きな支えになっている。「ゆりかご」に預けた当時（この時を待たない出す。いま振り返ってみても、出産前に誰かに相談できたとは思えない。ただ、「ゆりかご」の前で呼び止められて良かった。アオイさんは思っている。「私は「ゆりかご」で声を掛けられ、父親の支えもあったから、子どもと一緒に暮らす人生を歩むことができた。でも、そっけなかったら今の明るい未来はなかったかも知れない」

（ゆりかご15年「取材班」）



今は赤ちゃんのゆりかごに預けたアオイさん（仮名）。

たのびのび
母たちの思い
2022.4.29

連載「いのちの場所」について、ご意見や感想をお寄せください。〒860-8506、熊本県日新聞社文化生活部。ファクス096(361)3290、メールはkurashi@kumanichi.co.jpまで。

連載で伝えたこと

子どもや母親 当事者の思い

- ◆ 宮津さんはあくまで「159人の中の1人」
- ◆ 自宅出産の過酷さ
- ◆ 出産間際の長距離移動
- ◆ 相談の大切さ
- ◆ 出自を求める気持ち
- ◆ 真実告知の難しさ

病院や施設 支える側の思い

- ◆ 「匿名でないと救えないのか」
- ◆ 「名前を隠したままではしっかりした支援につなげない」
- ◆ 「内密出産」という選択は最適解か
- ◆ 出自の情報が分からないまま養育にあたる施設の苦悩
- ◆ 模索続くフランス、ドイツ

ワッペン報道で伝えたこと

- ◆ 預け入れ後 半数は特別養子縁組に
- ◆ 産婦人科医、小児科医が見る「ゆりかご」「内密出産」の課題
- ◆ 映画「ベイビー・ブローカー」。是枝裕和監督の思い
- ◆ 映画の舞台となった韓国版「ゆりかご」の現状を紹介
- ◆ 地域で支える妊産婦の心 精神科との連携を進める大分県の取り組み
- ◆ 子ども政策担当相へのインタビュー 政治の役割は

当事者ら集めシンポジウム

- ◆ 子どもへの支援は
- ◆ 当事者「出自が分からないのも出自」「今後の15年は当事者が語るべきだ」
- ◆ 出自分からぬ子 養育困難「命最優先で、思考停止になっていないか」
- ◆ 困窮妊婦を救うには
- ◆ 駆け込み寺 匿名性が必要
- ◆ 社会的連携ない内密出産
- ◆ 検証しあう場 職種横断で



記者たちの思い



林田賢一郎記者



清島理紗記者



志賀茉莉耶記者

【林田記者】ゆりかごはその匿名性ゆえに賛否が分かれるが、「目の前の母子を支えたい」という関係者の思いは同じ。「母親の願いと、子どもの思い両方を追い求めるは不可能ではない」。制度を見直しながら前に進むフランス、ドイツの福祉関係者の言葉は参考になると思う。

【清島記者】児相職員の「ゆりかごは、女性だけが出産の責めを追う社会の価値観を追認しているのではないか」という問いかけが忘れられない。事例の半数以上が「孤立出産」で、女性は命懸けの行動を強いられている。一方で男性の影はあまり見えない。ゆりかごはジェンダーギャップや性教育の不足など多くの社会問題を映す象徴だと思う。15年たって、宮津さんが声を上げたことで、他県の男子中学生も取材に応じてくれた。「生みの母に会いたい」と伏し目がちにつぶやいた少年の表情に胸を打たれた。今後も“第一の主人公”である子どもの声に耳を傾けていきたい。

【志賀記者】生後間もなく電話ボックスに置き去りにされた20代の男性取材した。実の親に遺棄されたという点ではゆりかごに通じる背景がある。男性は自分の出自を求め、行政機関に開示請求をしたが、結果は「何も分からないことが分かった」。ゆりかごでは「母親の匿名姓」と「子どもの出自を知る権利」が真っ向から対立することがある。時に当事者を置いて議論がヒートアップすることもあるが、当事者の思いや立場に立ち返って、取材することの重要性を感じた。

取材で変わったこと 宮津さんのその後

- ◆ 2022年9月 国が「内密出産」のガイドラインを公表
- ◆ 2023年4月 熊本市が妊娠葛藤相談の専門部署を開設
- ◆ 2023年5月 熊本市と慈恵病院が「出自を知る権利」の検討会を設置
- ◆ 東京で赤ちゃんポストの開設計画が複数浮上
- ◆ 宮津さんが「子ども大学」の開設を公表

取材は続く...

- ◆「母親の匿名性」と「子どもの出自を知る権利」を両立させる支援のあり方は
- ◆「ゆりかご」「内密出産」の法整備の必要性は

予期せぬ妊娠は今後もなくなることはない
目指すのは「ゆりかご」が必要とされない社会



ご清聴、ありがとうございました